

氏 名	清水 隆 房
	し すみ たか ふさ
学位の種類	農 学 博 士
学位記番号	論 農 博 第 780 号
学位授与の日付	昭 和 54 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	施設園芸経営の展開構造 —愛知県渥美地域における事例的研究—

論文調査委員 (主 査) 教 授 頼 平 教 授 上 村 恵 一 教 授 菊 地 泰 次

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、施設園芸の発展の著しい愛知県渥美地域を分析対象としてとりあげ、その発展のメカニズムを解明するために、下記の3部10章をあてている。

まず第1部では、施設園芸の産地としての発展過程を考察している。第1章では、施設園芸の発展過程を、導入期、産地形成期、産地発展期の3段階に区分し、各段階の施設園芸の特質を複数指標を用いて表示し、これを類型化している。ついで第2章では、施設園芸の導入期において、個別農家が採用した革新技術の性格を分析して、企業活動の展開方向を明らかにしている。第3章では、その後の施設園芸の発展過程について同様な分析を行なっている。

第2部と第3部は、本書の中心的部分であり、施設園芸経営の発展に及ぼした経営能力の影響を定量的に分析した諸章から成り立っている。

第2部では、産地形成期の施設園芸を分析対象としている。第4章では、施設園芸経営者が、他の生産方向を採用する経営者と比べて、どのような特質をもつかを分析し、第5章では、施設園芸経営者の能力が生産構造と所得形成に与えた影響について解明している。ついで第6章では、とくに、施設園芸の未導入農家と零細規模農家によって組織された温室協業経営をとりあげ、その大規模生産の有利性を構成する諸要因を分析して、発展的な協業方式について検討している。

第3部では、産地発展期の施設園芸を分析対象としている。第7章では、生産方向を異にする施設園芸経営について、施設投資の行動を分析し、その経営間の差異をひき起こした経営機能の構成要因を明らかにしている。第8章では、とくに電照菊を主幹部門とする施設園芸経営について、技術的能率の経営間差異を分析し、その差異をもたらした経営組織および経営管理面の要因を解明している。第9章では、現有施設をもとにしながら、生産物の価格変動に適應するための短期計画と、革新的な大型ガラス室を導入する場合の長期計画とを策定し、経営の将来の発展方向について展望を与えている。

最後に第10章では、以上の分析結果を総括している。ここでは、まず施設園芸の発展段階別に、経営機

能の特質とそれに対応した経営の生産構造を要約し、つぎに経営機能と生産構造との間の関係が、経営の発展に伴ってどのように変化するかを考察して、経営発展のメカニズムを明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、わが国農業の中で戦後著しい発展を示した施設園芸をとりあげ、その経営発展のメカニズムを解明したものである。いま本論文の評価すべき点をあげれば、以下のとおりである。

(1) 従来、農業経営学の分野では、農業の動態的発展にとって経営能力が重要な役割を果たすという理論を展開しながらも、その定量的研究はほとんどみられなかった。著者は、農家主導型の技術革新によって発展してきた渥美地域の施設園芸農家群について、その経営能力の構成要素を分析し、定量的指標を作り、それが経営の生産構造および経営成果に及ぼす効果について定量的に分析し、この研究分野では先駆的な研究成果をあげている。

(2) 著者は、施設園芸発展の動因を継起的な技術革新に求め、生産方向および生産方法の革新が、畑地かんがいを中心とする土地基盤整備事業の進展と相互に補完し合いながら、経営構造を段階的に変質させてきたメカニズムを実証的に解明している。しかも施設園芸経営の将来の発展方向について、短期および長期の経営計画を策定し、動態的経営発展理論の分野において、いくつかの新知見を加えている。

(3) 経営部門組織内に占める施設園芸部門の重要度は、産地の立地条件およびその発展段階によって異なるが、さらに農家の経営要素構造と経営者の選好および能力に応じて大幅に異なることを実証している。

とくに産地形成期において、同一耕地規模階層でも、経営者が投機選好的であるほど施設園芸に専門化する傾向があり、さらに経営者の総合能力が上位であるほど、そして変動能力が動態的であるほど施設規模を拡大し、高度化する傾向があることを解明している。また、総合能力が上位であるほど計画生産・執行労働節約・管理集約的な生産構造を示し、変動能力が動態的であるほど生産方向革新・執行労働節約・管理集約的な生産構造を示すことを明らかにしている。

ついで産地発展期においては、経営者の総合性機能が上位であるほど、また志向性機能が市場志向的であるほど施設園芸に専門化し、革新的生産方向を選択し、高い施設園芸部門所得をあげていることを実証している。

経営者機能に関するこれらの分析結果は重要であるが、とくに独自の定量的分析方法を開発した点は高く評価されるべきである。

(4) その他、施設園芸部門規模を異にする農家群の能率的生产関数分析、および純収益期待値—平均偏差効率点計画法による施設園芸経営計画の策定などは、施設園芸の将来の発展方向について、貴重な示唆を与えてのる。

以上のように、本論文は、農業経営の動態的発展理論の構築に関していくつかの新知見を加えたものであり、農家経済分析学の研究ならびに農業の実際面に寄与するところが大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。